男性性・女性性の2側面についての検討 II

——自己期待と他者期待——

京都大学 山口 素子¹

Two aspects of Masculinity-Femininity II

Motoko Yamaguchi (*Department of Educational Psychology, Kyoto University, Sakyo-ku, Kyoto 606*)

This study was designed to explore two aspects (mother-father; woman-man) of Masculinity-Femininity in personality. Sixty-five middle school students, 150 high school students and 219 university students were asked to rate the desirability for them, their fathers and mothers, and society of each of 45 items comprising a questionnaire which described valid characteristics of these two aspects. Analysis of the results revealed that male subjects in all age groups seemed to feel that their fathers desired them to be more masculine (i. e., father and man) than they, themselves, desired. Those of high school and university age also seemed to feel that their mothers and fathers and society desired more motherliness of them than they, themselves, desired. Female high school and university subjects seemed to feel that their fathers and mothers desired much more femininity (mother and woman) and much less masculinity (father and man) than they, themselves, desired.

Key words: masculinity-femininity, mother-father, man-woman, questionnaire, adolescence.

心理学的男性性・女性性を測定する従来の性度テストの多くは、項目の反応の性差によって定義されており、男性性・女性性が単一の次元の両極にあるという仮定から出発している。これに対し、近年男性性・女性性を一つの次元の両極としてではなく、それぞれ独立した次元として測定する試みがなされはじめている (Bem, 1974; Heilbrum, 1976; 近藤, 1980; Spence, Helmreich, & Stapp, 1975)。これらのテストによると、1人の人間の中に男性性・女性性両方の存在が可能となる。この場合の男性性・女性性とは、生物学的に男性・女性と言われているもの²とは必ずしも関係なく、人間の歴史の発展を通して、長い間に固定され、観念化された“男なるもの”、“女なるもの”のイメージであるといえよう (多田, 1973)。これは、いわゆるステレオタイプな性的性格ということもできる。ところでこのようなイメージとしての男性性・女性性を考える場合、普通に考えると、何か全体的で包括的な男性性・女性性というもの

が存在しているように考えられがちであるが、実際には様々なイメージが混合していると思われる。たとえば、Clifton, McGrath, & Wick (1976) は、典型的な主婦、バニーガール、婦人クラブ員、職業婦人、女性の運動競技者それぞれに適切だと思われる形容詞を153のリストの中から被験者に選ばせた。その結果、それぞれに重複する形容詞はほとんどなかったと述べている。そこで山口 (1985) はその中で、子供に対する母としての女性性 (Fm)、男性に対する女性としての女性性 (Fw)、子供に対する父としての男性性 (Mf)、女性に対する男性としての男性性 (Mm) という、男性性・女性性それぞれの2側面をとりあげ、それを測定する試みとして質問紙を作成した。そして性同一性が重要な課題となる思春期・青年期の男女が、これらの側面をどのように取り入れようとしているかを検討した。その結果、以下のことが考えられた。(a) 男女共通して、性別、年齢にかかわらず、性としての男 (Mm) あるいは女 (Fw) というよりも、親としての父 (Mf)、母 (Fm) の方が重じられている。(b) 男女で異なった点では、まず男子では、これらの側面に対する意識が一貫して安定しており、自分がどのようになりたいかと問われた場合中学・高校・大学を通して Masculinity³ の2尺度に対して

¹ 本論文をまとめるに際して御指導下さいました京都大学教育学部河合隼雄教授に厚く感謝いたします。

² マネーとタッカーによると、性は sex と gender にまず大きくわけられる。この場合 sex は出生前に分化する生物学的で先天的な性であり、他方 gender は出生後に分化する心理社会的な、いわば後天的な性である。本論文のここでの“生物学的に男性・女性と言われているもの”とは、この分類による sex にあてはまる。

³ Mf と Mm の2側面をあわせた広義の男性性をここでは Masculinity と記す。同様に Fm と Fw の2側面をあわせた広義の女性性を Femininity と記す。

Table 1
質 問 項 目

Femininity		Masculinity	
Fm (Femininity-mother)	Fw (Femininity-woman)	Mf (Masculinity-father)	Mm (Masculinity-man)
1 子供を育てる	10 か わ い い	19 威 厳 の ある	28 冒険心にとんだ
2 つつみこむような	11 色 気 の ある	20 家 族 を 養 う	29 勇 敢 な
3 いつくしみ深い	12 し な や か な	21 厳 し い	30 エネルギーが豊富な
4 自己犠牲的な	13 曲 線 的 な	22 権 威 的 である	31 た く ま し い
5 かいがいしい	14 お し ゃ れ な	23 子供に意見する	32 論 理 的 な
6 子供を産んだことのある	15 細 や か な	24 子供の独立を喜ぶ	33 闘 争 的 な
7 ふ く よ か な	16 声 が 高 い	25 家族の生活を守る	34 筋 肉 質 の
8 献 身 的 な	17 従 順 な	26 指 導 力 の ある	35 ほ ね ば っ た
9 あ た た か い	18 情 緒 的 な	27 家 計 を 支 える	36 行 動 力 の ある

Femininity の2尺度より高い得点を与えた。一方女子では、これらの側面に関する意識が不安定であり、特に中学から高校にかけて質的に変化し、大学になって初めて Masculinity の2尺度よりも Femininity の2尺度に対してより高い得点を与えるというパターンになる。(c) 女子においては Masculinity, Femininity のそれぞれの2側面がいずれも望ましいとされるのに対し、男子では Fw (男性に対する女性としての女性性) だけは望ましくないものとされ、男子においては、Femininity の2尺度 Fm と Fw が相当異なったものとして受けとられていることが考えられる。

ところで、柏木 (1974) によると、性役割学習過程は、人の一生を通して発達的に変化していく。まず幼少時には、親のしつけに代表されるような賞罰による強化学習が主で、親の与える (+) (-) の強化の内容、強度に応じて、社会が自分の性に対して期待している役割特性を身につけていく。これに対して、子供が成長するに従って、親の強化の規定性は相対的に小さくなってゆき、外的な強化からの規定から脱して、別な仕方での学習に移行してゆく。ここでは、他者から何が期待され、どう強化されるかによらず、自分自身が自身の性役割をどのようなものと考えるか——本人の性役割認知ないし性役割観に従って自己の性役割行動特性を選択し形成してゆくという。このように、思春期・青年期における性同一性の課題を考える場合、現実からの直接的な強化に加えて、本人自身が男性性・女性性をどのようにとらえるかという認知的な側面が重要となるであろう。それにとともに親からの影響も、現実の親からの直接的な強化よりも、青年によって認知される内的な親からのメッセージというものが重要になってくると考えられる。つまり自分自身が男性性・女性性をどのようにとらえ、自分がどのようにになりたいと思うか、あるいは、両親や社会が

自分にどういう風な人間になることを期待しているであろうと本人が感じているかなど、これらの思いが複雑にからみあい、様々な葛藤を通して、人格のある一面が形成されていくと思われる。前回の研究では、このうち本人がどのようになりたいと思うか (ここではこれを自己期待と呼ぶことにする) という点に焦点をあてた。そこで今回はそれに加えて、母親が自分に対してどのような人間になることを願っていると被験者本人が感じているか (母親期待)、父親が自分に対してどのような人間になることを願っていると思うか (父親期待)、社会一般からどのような人になる事を望まれていると思うか (社会期待⁴) という3点をとりあげ、これら本人が感じる他者からの期待 (母親期待、父親期待、社会期待の3つを合わせて、ここでは他者期待と呼ぶことにする) と自己期待との関係を発達的に検討してみたい。

方 法

質問紙による調査がおこなわれた。

質問紙 山口 (1985) による男性性・女性性の2側面を測定する質問紙が用いられた。なおこの質問紙の作成にあたっては比較検討のために A (Adult) 尺度が加えられたが、今回の研究にはこのA尺度は直接的には関係していないと思われるので、A尺度をはぶく Fm, Fw, Mf, Mm の4尺度が使用された (Table 1)。

調査対象 中学生 (男 33 名, 女 32 名), 高校生 (男 83 名, 女 67 名), 大学生 (男 119 名, 女 100 名)。これらの被験者は前回の実験 (1985) と同一の被験者である。

⁴ ここでいう社会期待とは、本研究における“社会一般からどのような人になる事を望まれていると思うか”という事を便宜上省略したもので、social desirability と同義ではない。

調査方法 授業を利用して、集団で実施した。時間は制限されなかったが、所要時間はほぼ 50—60 分であった。

調査内容 質問紙 36 項目について、“あてはまらない”から“あてはまる”までの7段階スケールを設定し、同一被験者に次の4種類の教示に従って4回評定を求めた。(a) あなたは将来どのような人になりたいと思いますか？ (b) あなたのお母さんは、あなたにどのような人になってほしいと願っているのでしょうか？ (c) あなたのお父さんは、あなたにどのような人になってほしいと願っているのでしょうか？ (d) 社会(世間一般)から、あなたはどのような人になる事を望まれているのでしょうか？ 本研究の目的は先に述べたように被験者が男性・女性性をどのようにとり入れようとしているかにあるので、教示(a)は本人の現実の姿ではなく、どのような人になりたいかということをつたねた。また(b)(c)(d)は現実の両親あるいは社会からの回答ではなく、あくまで被験者本人が考える内的な両親あるいは社会が被験者に何を期待しているかと考えるかを問う教示とした。質問項目は4回の教示ごとにランダムに配置された。なおこの調査は前回の研究(1985)と同時にこなわれた。そのため教示(1)に対する回答の結果は前回の報告と同一のものである。

結果の処理 評定の結果を数量化するために、“あてはまらない”から“あてはまる”までの7段階について、0—6までの得点が与えられた。

結 果

まず自己期待、母親期待、父親期待、社会期待に対する評定の結果について、全6群〔(中学・高校・大学)×(男・女)〕それぞれでの、各尺度の平均とSDが求められた。さらに自己期待と母親期待、自己期待と父親期

Fig. 1-1. 自己期待と母親期待 (男子).

(得点は0—54点で、27点以上は“望む”を、27点以下は“望まない”を意味する。)

待、自己期待と社会期待、この3つの関係をみるために、自己期待の平均と他のそれぞれの平均との差の有意性が t 検定で求められた (Fig. 1-1, 1-2, 1-3, 2-1, 2-2, 2-3)。

その結果を男女別に述べていきたい。まず男子についてみると、

1. 自己期待と母親期待の関係 (Fig. 1-1) は、中学では両者の間にほとんど差がないといえるであろう。次に高校になると Mm を除いて母親期待が本人の望みよりやや大きい傾向があり、その中でも Fm について、特に母親の望みが大きいと感じられている。大学に入っても Fm で自己期待と母親期待のズレが最も大きい。ここでも母親は特に Fm をより多く望んでいると本人に感じられている。それに対し Mm については有意に反対の傾向を示している。これらをまとめると、自己期待と母親期待は、中学時代にはほとんど差がないが、高校、大学では全般的に、自己期待より母親期待がやや高くなる。その中でも Fm に関するズレが特に強調されて感じられている。Mm についてだけでは、高校、大学と年齢が進むにつれてむしろ逆の傾向を示している。ただしそ

Fig. 1-2. 自己期待と父親期待 (男子).

Fig. 1-3. 自己期待と社会期待 (男子).

の程度は Fm におけるズレほど顕著ではない。

2. 自己期待と父親期待の関係は (Fig. 1-2), 中学では自己より父親の方が Mf 得点が高い。また Mm でも同じ傾向がある。つまり中学では Masculinity の2側面について父親が自分より多く望んでいると感じられている。この傾向は、高校・大学でも一貫している。一方 Femininity の2側面については、中学では2尺度とも、自己期待と父親期待の間にはほとんど差がない。しかし高校では、Fm においては有意に父親期待の得点が高くなる。大学でも有意差はないが、やはり父親期待の得点が高い傾向にある。それに対し Fw については、高校では中学と同じくほぼ差はみられないが、大学になるとむしろ父親は本人ほど望まないと感じられるようになる。このように父親期待は、Masculinity の2側面に関しては一貫して本人より高い期待をもっていると青年男子にはとらえられているが、Femininity の2側面については、Fm と Fw で父親の期待が違うととらえられている。つまり Fm は本人より望む方向に、Fw は望まない方向に感じられている。ただし中学では Fm, Fw 共に自己期待とほとんど差がない。

3. 自己期待と社会期待の関係は (Fig. 1-3) 母親期待や父親期待との関係のように自己期待と社会期待のグラフが接したり交叉したりすることがなく、一般的に社会期待が自己期待より高いのが特徴である。その中では高校で Fm, Fw 大学では Fm, Mf でのズレが大きい。この中では Fm が高校・大学とズレが大きいところにやや連続した傾向がみられるが、他の尺度については、各年齢によってズレが大きい個所が一定していない。これらの事より、社会期待と自己期待との関係は、質的というより量的な差が強調され、全体的に社会期待の方が自己期待より高いと認知されている。その中で特に強調される尺度は、年齢によって流動的であり、あまり一貫した傾向はみられない。しいてあげれば、Fm が高校・大学と連続してズレが大きい傾向があるといえるであろう。

Fig. 2-1. 自己期待と母親期待 (女子).

う。

以上 1. 2. 3. の結果から特徴的な点を年齢別にみてゆくと、まず中学では、父親の期待が Masculinity の2側面について本人より高いと認知されている。高校でも Masculinity の2側面については、やはり父親の期待が高いと感じられている。一方母親からは Fm を最も自分より多く望まれていると感じられており、父親、社会からも同様の傾向を感じている。大学ではやはり一貫して、父親から Masculinity の2側面をより多く望まれていると認知されている。Fm についても母親からの期待がやはり大きく感じられ、父親、社会からもややそのような傾向を感じている。しかし Fw については父親が本人より少なく望んでいると感じられている。

次に女子についてみると、

1. 自己期待と母親期待の関係は (Fig. 2-1), 中学では性質としては両者があまり変わらず、自己期待より母親期待の方が全体的にやや高い。高校でも両者の性質はあまり変わらないが、Fm で母親期待の方の望みが高い程度が強い。大学では、母親が Fm をより望むと感じる

Fig. 2-2. 自己期待と父親期待 (女子).

Fig. 2-3. 自己期待と社会期待 (女子).

傾向が続き、一方 Mm は本人より望まないと認知されるようになる。

2. 自己期待と父親期待の関係は (Fig. 2-2)、中学では母親期待との関係と同じく、性質としては両者にほとんど差はなく、全体的に自己期待より父親期待の方が得点が高い。しかし高校になると Femininity の 2 側面に関しては父親がより多く望み、Masculinity の 2 側面に関しては有意差はないものの、本人ほど望まない傾向となる。特に Mm の得点は 27 点以下、つまり本人との比較においてだけではなく、「望まぬ」という評価になった。⁵このように高校では、Masculinity と Femininity との区別が、本人より父親において大きくなっていると感じられている。その傾向は大学ではさらに大きくなり、有意な差としてあらわれる。つまり大学では、はっきりと父親は自分に本人が考える以上により Femininity の 2 側面を求め、逆に Masculinity の 2 側面はなくなる事を望んでいると認知されている。また Femininity の中では Fm がより望まれ、Masculinity においては Mm がより拒否されていると感じている。このように自己期待と父親期待の関係は、中学では両者の性質が同じようにとらえられているが、高校になると質的にやや違っていると感じられ、大学ではその質的違いが明確になってくるといえるであろう。

3. 自己期待と社会期待との関係は (Fig. 2-3)、中学では 1.2. と同様、質的には両者ともあまり変わらず、全体的に自己期待より社会期待の方が得点が高い。高校・大学でも傾向としては同じ関係であるといえるであろう。ただしその中では、中学では Mm のズレが最も大きいのに対し、高校・大学では Fm のズレが最も大きい。

女子での 1.2.3. の特徴を年齢別にまとめると、まず中学では質的には自己期待と母親期待、父親期待、社会期待がみな似ており、むしろ量的なズレの方が強く感じられている。高校になると父親期待との関係は、やや質的な違いが感じられ、父親は自分より Femininity の 2 側面を多く望み、Masculinity の 2 側面は望まぬと認知されている。母親期待との関係は質的にも量的にも本人に近い。しかし Fm については、母親の方が自分より望みが高いと感じられている。社会期待との間でも Fm でのズレが最も大きい。大学では父親との質的ズレがさらに明確に感じられている。特に Femininity では Fm が強く望まれ、Masculinity では Mm が拒否されると感じている。母親期待との関係でも、Fm と Mm で同じ傾向がみられる。社会期待との関係においても Fm が最も自分より期待が高いと認知されている。

考 察

前回の報告 (山口, 1985) では、自己期待が男女によ

⁵ Fig. 1-1 の注参照。

って異なった発達の変化をみせることを述べたが、今回の研究における自己期待と他者期待との関係においても、男女で異なった様相が示された。

まず男子では、父親期待において中学から大学まで一貫して Masculinity の 2 尺度がより望まれているとしているのが第一の特徴であろう。つまり男子は父親から、より父親らしく (Mf)、より男らしく (Mm) あれと望まれているという事をいつも感じているといえる。中学においてはこのズレが一番大きく感じられているが、高校・大学になると、さらに母性的な面 (Fm) についてもより望まれていると感じるようになる。この面についての意識のズレは母親との間に特に意識されるが、同時に父親との間でも感じられている。一方女性性 (Fw) に関してはこのような傾向はみられない。自己期待において、男子では Fm と Fw がやや異なった受けとられ方をしていることが前回の研究でわかったが、自己期待と他者期待との関係においても、両者は異なった受けとられ方をしていると考えられる。結局男子では、自分の性 (sex) に属する Masculinity の 2 側面を他者からより望まれているという感覚と、(高校・大学になるとそれに加えて) 母性性 (Fm) をより望まれているという感覚、この 2 つを同時に認知しているといえる。河合 (1978) が「日本社会では、社会の文化や社会規範が、母性的な色合いを強くもつ」と述べるように、日本社会では母性的な特性がより重んじられるということが一般に指摘されている。このような社会においては、思春期・青年期の男性は、性同一性の課題として自分の性である Masculinity を獲得することが課せられるのと同時に、社会の成員として、母性性をも自らのものにする事が要求されていると感じるのかもしれない。このため、性同一性の獲得が複雑なものになっていることが考えられる。

一方女子では、中学時代は、母親期待・父親期待のどちらも性質としては自己期待とあまり異ならず、量的差異の方が感じられている。しかし高校・大学になると、父親期待と自己期待との間に質的な差異が生じてくる。つまりより Femininity の 2 側面が増加し、Masculinity の 2 側面はより少なくと父親から望まれていると認知されている。その中でも特に母性性 (Fm) がより望まれ、男性性 (Mm) が拒否される。母親期待と自己期待との間にはあまりズレがないが、高校、大学と年齢が上がるにつれて、やや父親と同じズレを示すようになる。このことより、女子の自己期待が中学から高校にかけて質的に変化する際、父親からの期待というものを本人が強く意識しているということが考えられるかもしれない。そして男子に対する考察で述べたように、思春期・青年期では、性同一性の課題として自分の性 (sex) に属する Femininity の 2 側面の特性を身につけると同時に、

日本の社会構成員の1人として文化的に必要とされる母性性を身につけることが要求されるとするならば、女子の場合は、この性同一性で獲得すべき Femininity の中の母性性と、社会的に必要とされる母性性が一致するので、Femininity の2側面の中でも、母性性がより強く望まれていると感ずるのであろう。

ここで今度は、自己期待と社会期待との関係について述べてみたい。この両者の関係は、全体的に父親期待・母親期待と自己期待の關係に比べると、質的な差異よりむしろ量的な差異が強調されている。各群で他の尺度よりズレがやや大きい個所があるが、一貫した傾向はみられず、年齢によって社会期待とのズレは流動的にとらえられている。それだけ社会期待に対するイメージが、父親期待、母親期待ほどはっきりしていないという事かもしれない。そのため質的には、自己期待と似たものになったのだろうか。Elkind (1967) は、青年期における egocentrism の特徴として、imaginary audience と personal fable をあげた。つまりこの時期においては、青年はまず自分自身に対する関心が強く、自分の意見と人の意見を区別することがまだできないというのである。日々に身近に接する両親とは違い、青年にとっては社会は漠然としたものであり、そのためこのように自己期待と社会期待が似たものになったのかもしれない。このように考えてくると、この時期の男女にとっては、内的なイメージとしての他者との間の認知のズレを意識する場合、漠然とした社会一般よりもむしろ身近な父親あるいは母親との間に質的ズレを意識していると考えられる。

このように、今回の調査の結果によると思春期・青年期には様相は異なっているが、男女それぞれ他者からの期待と自己期待との間のズレを感じていることがわかった。ただし男子の場合は、自己期待において、中学時代にすでに性同一性がある程度確立し、大学にいたるまで変化なく安定している。また自己期待と他者期待との関係も、中学・高校・大学とほぼ同じ傾向を示す。それに対し、女子では、中学から高校の間に自己期待において大きな質的変換がみられ、また自己期待と他者期待との関係にも同様に変化がみられる。この違いから、男女共に他者とのズレを認知していても、女子の方がそのズレに対する動揺が激しいという可能性が考えられるかもしれない。ただし、これらの結果の一般化のためには、より多層な標本の収集が必要と思われる。

要 約

これまで大きく男性性・女性性といわれてきたものの中には、それぞれに様々な側面があると思われる。本研究では、その中で、女性性においては、子供に対しての母としての側面 (Fm)、男性に対する女性としての側面

(Fw) の2側面を、また男性性においても同様に、子供に対しての父としての側面 (Mf)、女性に対しての男性としての側面 (Mm) の2側面をとりあげ、性同一性が重要な課題となる思春期・青年期の男女が、これらの側面についてどのような認知をもっているかが検討された。そのためこれらの側面について、(a) 自分自身がどのようにになりたいか (自己期待)、(b) 母親は自分にどのようになってほしいと願っていると思うか (母親期待)、(c) 父親は自分にどのようになってほしいと願っていると思うか (父親期待) (d) 社会は自分にどのような人間になることを期待していると思うか (社会期待) という4つの期待像が調査され、自己期待と他者期待との関係が発達的に検討された。その結果、

1. 男子では、中学から大学まで一貫して自分の性 (sex) に属する Masculinity の2側面を、自分が望む以上に他者から望まれていると認知している。またそれに加えて、高校・大学では母性性 (Fm) もまた、他者からより望まれていると感ずられていることが示された。

2. 一方女子では、中学では自己期待と他者期待との間には、質的差異より量的差異の方が強く認知されている。しかし高校に入ると、自己期待と父親期待との間に質的差異を感じるようになり、Femininity の2側面が増加し、Masculinity の2側面はより少なくて父親から望まれていると認知するようになる。さらに大学ではその傾向が明確になってくる。また母親期待との間にも、父親期待ほど強くないが同様の傾向を高校・大学と認知している。この場合 Femininity の2側面の中でも、Fm が特に強く望まれていると感ずられていることがわかった。

引用文献

- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Clifton, A., McGrath, D., & Wick, B. 1976 Stereotypes of women: A single category? *Sex Roles*, 2, 135-148.
- Elkind, D. 1967 Egocentrism in adolescence. *Child Development*, 38, 1025-1034.
- Hilbrum, A. B. 1976 Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimensions. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 44, 183-190.
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知 (Ⅲ) 教育心理学研究, 22, 205-215.
- 河合隼雄 1976 母性社会日本の病理 中央公論社
- 近藤英子 1980 独立次元としての男性性・女性性——新しい性度尺度の作成をめぐる—— 京都大学卒業論文(未公刊)
- マナー J., タッカー P. 朝山新一(訳) 性の署名 人文

書院

(Money, J., & Tucker, P. 1975 *Sexual signatures on being a man or a woman*. Boston-Toronto : Little, Brown and Company, Inc.)

Spence, J. P., Helmreich, R., & Stapp, J. 1975 Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Social*

Psychology, **32**, 29-39.

多田建治 1973 パーソナリティに於ける男女性]の次元 心理学評論, **16**, 189-204.

山口素子 1985 男性性・女性性の2側面についての検討 心理学研究, **56**, 215-221.

——1987.7.3. 受稿, 1988.7.9. 受理——